

## 研究動向

震災以前の  
村上春樹

山根 由美恵

純文学とエンターテインメント文学の壁をなくしたと言われる村上文学は、文学的評価が高くはなく、謎解き本が氾濫し、研究者が日本文学研究の中に位置づけているといった状態にはなかった。しかし、現代文学の最前線を走る村上春樹は常に注目されており、村上に関する言説は驚異的に増加している。そこにはエッセイ、書評、謎解き本、便乗本などといったものも含まれるが、研究論文も確実に増えてきた。本稿では爆発的に拡散してゆく言説を全て拾い上げることはできないが、幾つかの特徴を捉えることとしたい。

『昭和文学研究』第40集(00・3)に米村みゆきによる「研究動向」が掲載されてから十年が経過した。「震災以前の村上春樹」というテーマを頂いたので、いわゆる「デタツチメント」から「コミットメント」というパラダイムチェンジの過渡期である「ねじまき鳥クロニクル」(94・95)までの研究に絞り、二〇〇〇年から最近までの研究動向を記述したい。なお、村上春樹研究選集として『村上春樹スタディーズ 2000-2004』(若草書房05)、『村上春樹スタディーズ 2005-2007』(若草書房08)が編まれ、今井清人による「解説」が付された。今回はこれらと内容の重複を避けていること、各論の副題を省略させて頂いたことをお断り申し上げたい。

先ず、村上文学の海外受容についての言説が多かったことが、二〇〇〇年以降の研究の特徴と言えよう。村上は四十カ国以上の読者を獲得し、様々な賞を受賞したことで、「世界のムラカミ」として認識されるようになった。二〇〇六年に開かれたシンポジウム「春樹をめぐる冒険」では十七カ国の翻訳者たちが一堂に会し、貴重な報告が行われ、後に『世界は村上春樹をどう読むか』(文藝春秋06)にまとめられた。パネリストである四方田犬彦が述べた村上文学の「文化的無臭性」という問題は、その後様々な場で取り上げられることとなる。

シンポジウム後も、フランク・オコナー賞、カフカ賞(06)、エルサレム賞(09)といった海外での受賞と連動し、海外での評価と日本の評価との落差が語られている。

村上が世界的に受け入れられている背景にはグローバル化の影響が窺える。木村章男「村上春樹VS.グローバルゼーション」(『神奈川大学国際経営論集』08・10)は、グローバルゼーションを「弁証法の運動」と捉え、村上にとっての自己とは絶えず自己否定と自己復帰を繰り返すグローバルゼーションⅡ「状況」であり、更なるグローバル化を目指し続けると述べている。平林美都子「村上ブランドはなぜ売れるのか?」(『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—』09・3)は、アメリカの翻訳事情との関連づけをはかった。二者ともこれまで村上研究で語られてきたアメリカ文化や文学ではなく、「アメリカ」という「状況」との関連を述べているのが特徴である。

久保田裕子「翻訳者・三島由紀夫と村上春樹の文化戦略」(『日本文学』08・11)は、日本文学受容がヘミシマからムラカ

ミへ）変遷している状況を述べ、その上で翻訳が孕むイデオロギイの側面や暴力性について言及している。逆に、翻訳者という立場からのジェイ・ルービン「ハルキ・ムラカミと言葉の音楽」(新潮社06)は、アメリカ滞在時の村上の動向をはじめとし、人間村上に関する貴重な言説が語られた必読の文献である。東アジアにおける村上受容に関しては、周知の通り藤井省三が精力的に論考を発表している(『村上春樹のなかの中国』朝日選書07、編著『東アジアが読む村上春樹』若草書房09等)。藤井の一連の論考は重要だが、黒古一夫(『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版07)が指摘するように、全てを中国に結びつける傾向にはやや強引さを感じる。また、孫軍悦(『翻訳の中の真理』(『日本近代文学』04・10)、王海燕「中国における「村上春樹熱」とは何であったのか」(『図書情報メディア研究』08)から、「ノルウェイの森」が中国における村上文学受容の核であることがわかる。

次に、この十年の間で進んだ村上春樹の研究基盤を述べたい。『村上春樹作品研究事典』(鼎書房99・増補版07)は全作品を網羅し、評価や読みのポイントが示され、村上春樹研究の基盤となっている。若草書房は『村上春樹スタディーズ』シリーズ(研究選集、村上春樹スタディブックスシリーズ)村上春樹研究の単行本)など村上春樹に関する文献を数多く刊行した。スタディーズシリーズには詳細な「文献総覧」が付されており、研究史の概観の一助となるだろう。また、加藤典洋、川本三郎、大塚英志、川村湊といった初期から村上を論じてきた批評家たちの論考や若い研究者の論考が単行本化され、新書(清水良典

佐藤幹夫、石原千秋)もこの期に続々と発刊された。

『解釈と鑑賞別冊 村上春樹』(08)は、村上春樹論を積極的に発表している研究者の論考の集成であり、今後一つの基盤となることは疑いがない。ここではテーマ論・装置論・キャラクター論・立論のためのリストといったように、一つの作品を論じるという形ではなく、多角的なテーマからのアプローチが特徴である。更に、今井清人による最重要文献四十八冊が紹介されており、村上春樹研究のおおまかな動向が掴める。論考を幾つか挙げてみたい。伊藤氏貴「孤独をめぐる冒険」では、村上作品の「癒し」の理由は、伝えるべき自分をもてないという孤独が「みな同じ」であり、それが連帯を生み出しているという重要な指摘を行っている。佐藤泉「上野千鶴子と村上春樹はとにもリブを相続し」はリブの社会史にふれながら、「ノルウェイの森」に歴史を再導入すべきと問題提起している。高橋龍夫「動物たち」は、村上作品における動物表象のあり方が既成一般の近代文学とは異なる次元に組み込まれており、近代の呪縛を逃れた世界観を実現していると説く。根岸泰子「迷宮へのガイド」は、加納クレタという存在を「微細な齟齬をはらんで渦巻く運動体」と述べている。

そして、注目されるのは一九八〇年代である。「1Q84」、「ねじまき鳥クロニクル」双方とも一九八四年が舞台となっており、一九八〇年代再評価の機運が高まっている。

宇佐見毅・千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』(おうふう08)は一九八〇年代をテーマに据えた論集であり、特に研究史は丁寧な仕事ぶりが窺える。いくつか挙げてみたい。荒井裕

樹「その力は弱い故に誰にでも」は、データチメントと評されてきた初期作品における人称に注目し、複数形の表現には他者への関係性が内在されていると指摘した。八〇年代の宗教の問題を取り上げた山下真史「ダンス・ダンス・ダンス」論、喪失ではなく「罪障感」を強調した野中潤「ノルウェイの森」と生き残りの罪障感、「パン屋再襲撃」に村上世界の転換を見る松井史絵「反復する物語」はそれぞれ重厚な作品論となっている。田村謙典「分析を遠隔操作する文学への「回路」」は、国語教育の現場において「鏡」の読解が自己対象化に反省へのメディアへと改変されていくという問題を追及した。宇佐見毅「村上春樹作品は日本文学に何をもたらしたか」は、村上作品の「癒し」の機能が多くの読者を獲得する理由であると述べた。また、近年村上と他の作家を比べる論考が増えてきた。加藤典洋は、これまでは「大江か村上か」という評価の地勢図が形成されていたが、今はむしろ両者の文学的営為の重なりあう部分に注目するべきであり、そこに日本の現代文学の未知の模様が垣間見られると述べている(『文学地図』朝日選書08)。

「羊をめぐる冒険」で言及される三島由紀夫に関する論考も増え、柴田勝二「作者」をめぐる冒険(新曜社04)は「ノルウェイの森」と「豊饒の海」との関係、小黒康正「近代日本文学のねじれ」(『文学研究』05・3)は三島、辻邦生、村上にトマス・マンの影響を見る。館野日出男「痛み」と「空虚」(『松山大学論集』06・2)は「ねじまき鳥クロニクル」の綿谷昇の造形には三島が投影されていると指摘、高澤秀次「三島由紀夫から村上春樹へ」(『北の発言』06・3・4)は、

「夏子の冒険」と「羊をめぐる冒険」との関係論している。

「海辺のカフカ」において顕在化してきた夏目漱石の影響については、早くに指摘した平野芳信「村上春樹と「最初の夫の死ぬ物語」」(翰林書房01)、半田淳子「村上春樹、夏目漱石と出会う」若草書房07、山根由美恵「螢」にみる三角関係の構図(『国文学』07)がある。また、柴田勝二「受動的な冒険」(『東京外国語大学論集』07)は「羊をめぐる冒険」と「ころ」との対比や徴兵忌避というモチーフを論じている。

新しい関係性としては、竹内清己「村上春樹へ／堀辰雄からアメリカへ／フランスから」(『文学論』08・2)、柴田勝二「中上健次と村上春樹」(『東京外国語大学出版会09)、とよだもとゆき「村上春樹と小坂修平の1968年」(新泉社09)、志賀直哉との比較を行っている伊藤佐枝「ヘバラバラの歴史」を語ることの倫理」(『論潮』09)、大塚英志「物語論で読む村上春樹と宮崎駿」(角川書店09)がある。

一九八〇年代の長編は分析が進んでおり、研究史は前出「村上春樹と一九八〇年代」に詳しい。洩れているものを挙げておくと、松枝誠「ねじまき鳥クロニクル」における「忘却の穴」をめぐる「立命館文学」04・3、太田鈴子「村上春樹『国境の南、太陽の西』の語りの構造」(『学苑』05・3)、山崎眞紀子「海に降る雨」(『日本文学』07・11)、鈴木智之「村上春樹と物語の条件」(青弓社09)、渡辺みえこ「語り得ぬもの」(御茶の水書房09)、小島基洋「村上春樹「1973年のピンボール」論」(『札幌大学総合論叢』09・3)がある。一九八〇年代の長編は、今後間テクスト性など新たな視点の導入が必要

だろう。「国境の南、太陽の西」、「ねじまき鳥クロニクル」は分析の余地が残っていると思われる。

長編に比べ遅れていた短編の研究も進んできた。単行本では酒井英行「村上春樹 分身との戯れ」翰林書房01等)、風丸良彦「村上春樹短編再読」みすず書房07)、山根由美恵「村上春樹〈物語〉の認識システム」若草書房07)が、雑誌論文ではソイヌ「名前からの逃避」(『九大日文』07)、西田谷洋「幻想空間の生成」(『国語国文学報』08・3)、高橋龍夫「村上春樹『パン屋再襲撃』の批評性」(『専修国文』08・9)、塩田勉「村上春樹『象の消滅』が意味するもの」(『世界文学』08・12)、浅利文子「村上春樹・意識と肉体の統合へ向かう『眠り』」(『法政大学大学院紀要』09)、現在連載中の加藤典洋「村上春樹の短編を英語で読む」(『群像』09・9)などが挙げられる。岩宮恵子「思春期をめぐる冒険」日本評論社04)、内田樹「村上春樹にご用心」アルテスパブリッシング07)、明石加代「『ねじまき鳥クロニクル』の水脈」「心の危機と臨床の知」(『06・1等)ら心理学者が村上文学を論じることも多くなってきた。その中、森平准次「『ねじまき鳥クロニクル』執筆における作者村上春樹氏の主体性と心理療法における心理療法家の主体性」(『高崎商科大学紀要』06)は、テクストの心理学側面ではなく、作家村上と心理療法家との類縁関係を論じている。

その他の視点としては、翻訳された村上作品を精力的に分析している塩崎久雄「村上春樹はどう誤訳されているか」若草書房07等)、映画という独自の視点で切り込んだ明里千章「村上春樹の映画記号学」若草書房08)、垣間見えるキリスト教の

影の意味を丁寧を追った今井清人「村上春樹とキリスト教」『解釈と鑑賞』09・4)がある。

また、国語教育の場で村上は取り上げられることが多くなった。日本文学協会研究発表大会の国語教育部会では必ず村上の発表が見られ、盛んに議論が行われている。村上文学は文章は平易だが、明解なテーマが見えにくい。そのような状況から、教科書に採用されることが増えた国語教育の場で切実に「読み」が必要とされている。今後、国語教育と文学研究とがより交流し、それぞれの成果が反映されることが望まれる。

今後の研究課題としては、先にふれた一九八〇年代という問題領域が挙げられる。村上は一九八〇年代について、「60年代後半の理想主義がつぶされた後の80年代は、オイルショックとバブル崩壊の間に挟まれた時代であり、連合赤軍事件とオウムとの間に挟まれた時代。非常に象徴的だと思う」「バブルは、はじけることによって結果的に戦後体制を壊してしまう。そうした破綻へ向けて着々と布石がなされていたのが80年代です」(『毎日新聞』09・9/17)と述べている。一九八〇年代は、村上文学の核となっており、今後更に検討すべきだろう。

問題なのは、現在においても先行論文を全て網羅せず、限られた論文のみ引用している論考が多いことである。村上春樹をめぐる研究は爆発的に増えた。しかし、それぞれの研究者が限られた論文を引用し、持論を展開する状況が依然としてある。これではいくらか多くの論文が書かれていても、研究としての質が向上しない。爆発的に増えた論文が整理され、それらを活用しながら切磋琢磨していく、次の段階の研究が望まれる。